

奈良県御所市

吉祥草寺

-茅原中ノ坊遺跡 第4次・第6次調査報告-



平成23年(2011年)3月
御所市教育委員会

例　　言

- 本書は奈良県遺跡地図「16-B-415」茅原中ノ坊遺跡の範囲内に相当する、吉祥草寺（御所市大字茅原 279）境内地において、御所市教育委員会が実施した発掘調査の報告書である。
- 現地調査は、第4次調査を木許 守（御所市教育委員会 技術職員）が、第6次調査を西村慈子・奥田智子（以上、同嘱託）が担当した。また、調査期間中、同教育委員会 藤田和尊の指導・協力があった。調査期間は、以下のとおりである。
第4次調査（平成17年2月1日～平成17年3月29日）
第6次調査（平成22年4月19日～平成22年4月21日）
- 遺構写真は各調査担当者が撮影し、遺物写真は奥田が撮影した。
- 本書の執筆分担は目次に示した。編集は奥田・木許が行った。

本文目次

例　　言	
目　　次	
1. 位置と環境（木許）	1
2. 調査の契機と経過（木許）	1
3. 調査の成果	
(1) 第4次調査	
①基本層序（木許）	2
②遺構（木許）	2
③遺物（奥田）	5
(2) 第6次調査（奥田）	
①基本層序	6
②遺構	7
③遺物	7
4. まとめ（奥田）	7
図版 1	
図版 2	
報告書抄録	

挿図目次

図1	茅原中ノ坊遺跡と周辺の遺跡
図2	調査地と周辺地形
図3	吉祥草寺寺域
図4	第4次調査 磐石9 断面図
図5	第4次調査 本堂平面・断面図
図6	第4次調査 出土遺物
図7	第6次調査 調査区 平面・断面図
図8	第6次調査 旧境内整地層 出土遺物

図版目次

図版 1-1	第4次調査 本堂基壇石積 西側辺
図版 1-2	第4次調査 本堂基壇石積 東側辺
図版 1-3	第4次調査 内陣礎石据付け状況
図版 1-4	第4次調査 本堂北端 土層断面
図版 1-5	第4次調査 渡り廊下基壇・排水管
図版 1-6	第6次調査 調査区全景
図版 1-7	第6次調査 北壁
図版 2	第4次・第6次調査 出土遺物・護摩札

1. 位置と環境

茅原中ノ坊遺跡は、御所市市街地の東方部に位置する。周辺では、近年京奈和自動車道建設に伴う発掘調査が盛んに実施されて様々な新知見が得られている。縄文時代晚期の豊富な遺構や遺物が検出された観音寺本馬遺跡や玉手遺跡はその顕著な例である。このほか、弥生時代の水田跡がこの茅原中ノ坊遺跡や今出遺跡で検出されて衆目を集めている。これらは、当該地の縄文時代や弥生時代に関するイメージを一新するもので、今後の調査・研究に重要な資料を提供した。

さて、吉祥草寺は、修験道の開祖として7世紀末頃に活躍した役行者（役小角）の生誕寺としてよく知られている。寺伝によれば、舒明天皇の発願によって創建され、その後、南北朝の動乱期に、貞和五年（1349）に高師直の兵火によって伽藍を焼失するが、本堂は応永年間（1394～1428）に再建されたとされる。そのときの本堂は三間×三間の規模であったが、後に南側に外陣が増築された。その増築の時期は、外陣に寛文五年（1665）の護摩札（図版2、右下）が残されたことから、その頃であると推定されている。

また、現在毎年1月に境内地で行われるトンド（左義長）は、その豪壯な姿がつとに有名で、古い行事の詳細を今に伝えることから、奈良県の無形民俗文化財に指定されている。

2. 調査の契機と経過

平成16年10月までに、宗教法人吉祥草寺は、現存の本堂建替え工事を計画した。当該地は、茅原中ノ坊遺跡として知られるばかりではなく、建替えが計画された本堂自体も、14世紀末葉ないし15世紀初頭に建立されたと伝えられている。

しかし、茅原中ノ坊遺跡の性格は、この時点までの周辺地区的発掘調査によっても判然としない

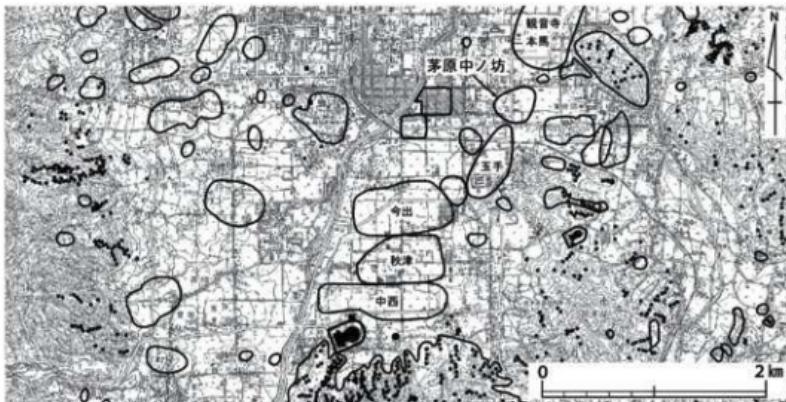


図1 茅原中ノ坊遺跡と周辺の遺跡 (S. = 1/50,000)

ことが多く、本堂部分周辺の遺構面の保存状態や深さなど全く不明であった。そこで当市教育委員会は、まず、国庫・県費補助事業として遺構の存否・範囲確認を目的とする試掘調査を実施した。その結果、本堂の建立当初の状態を伝える遺構が一定程度残っていることが判明したので、発掘調査を原因者負担による本掘調査に切り替えた。この試掘調査および本掘調査を第4次調査とする。

試掘調査は平成17年2月1日に着手し、2月23日から3月29日を本掘調査とした。その最終段階の3月27日に現地説明会を実施したところ、約300名の一般参加を得た。なお、試掘調査の成果は、「御所市文化財調査報告書」第34集（木許2008）で報告しているので参照されたい。

その後、平成22年度に至り、境内地内における参拝者用のトイレ新築工事が計画された。第6次調査は、この工事に先立って実施したものである。第6次調査の現地調査の期間は、平成22年4月19日から21日までの実働3日間である。

3. 調査の成果

（1）第4次調査（図3～6 図版1-1～5）

①基本層序（図5 図版1-4） 図5右端に調査区の中央部で南北方向に設定したトレーニングの断面図を掲げた。その北端付近を見ると、基壇石積の外側には、1層・2層の盛土があって現在の境内地を形成していることが判る。また、この付近は北方向に低くなる地形であるが、ここに焼土などを集めて盛土した整地層（7層）が見られた。基壇の石積はこの7層の上に築かれていることが明らかで、基壇はこのほか6層（暗灰色砂礫）などが積まれて形成されている。7層中から出土した遺物は、後述するように14世紀前半頃までのものであるから、基壇および本堂の建立時期が14世紀中頃であることが判る。

17世紀後半頃に外陣が増築された痕跡も土層に現れていた。すなわち、12層（暗黄褐色砂礫）は当初の基壇盛土である6層に対して層位的に上層に積まれたものである。

また、本堂南前面は、現境内に伴う盛土11層（黄灰色砂礫）の直下に厚さ5cm程の薄い焼土層（13層）が広がることが確認できた。

②遺構（図4・5 図版1-1～5） 本堂基壇の石積は、東・西・北面に残っていた。石積の外側周囲を幅1～1.5mの幅で掘削し、現境内整地層（1・2層）を除去すると、当初は2段積みであった石積の基底石列が現れた。ただし、上段の石と下段の石では面取りの方法などの調整が全く異なっている。上段の石はおむね長辺40～60cm程の石材で、下段の石材より相対的に大振りである。また角部がシャープな切出しがなっている。このことから、上段は後に積み直されたとみられる。

また、基壇南側の石積はほとんど抜き取られていた。南に外陣を増築したときに基壇も継ぎ足されていたが、その時に不要な石を抜き取ったものと考えられる。基壇を継ぎ足した際の石積は、図5左端や図版1-1に示したように、明らかに小振りな石材が使用されており、当初のものとの違



図2 調査地と周辺地形 (S. = 1/5,000)

いは明瞭に判る。外陣増築後の基壇全体の規模は、東西 11.82 m、南北 13.84 m である。

礎石は、図5の平面図に示したもののはほとんどが、今回撤去された建物の礎石として利用されていた。しかし、礎石 17・礎石 18 は発掘調査によって新たに検出したもので、外陣の礎石にも利用されていなかった。この2石は、礎石2と9の延長上および礎石3と8の延長上にそれぞれ位置していることから、向拝柱の礎石であったと考えられる。本堂の南に外陣が増築されたときには向拝が撤去されたのであろうが、元の本堂にはそれが存在したことが判明した。

礎石 1 ~ 16 は内陣の、礎石 19 ~ 24 は外陣の礎石である。礎石には、ほとんどの石材に十文字の墨描のけがきが残っていた。礎石 16 には径 20cm、深さ 1 cm の例込みが見られた。この礎石 16 のほか礎石 13 ~ 15 は、外陣増築前の内陣の礎石である。礎石 9 は径 10cm の円錐形の例込みが残っている。石塔等の部材の転用とみられる。また、増築後の外陣に用いられた石材は、総じて調整が粗雑で、角がシャープである。礎石 19 には

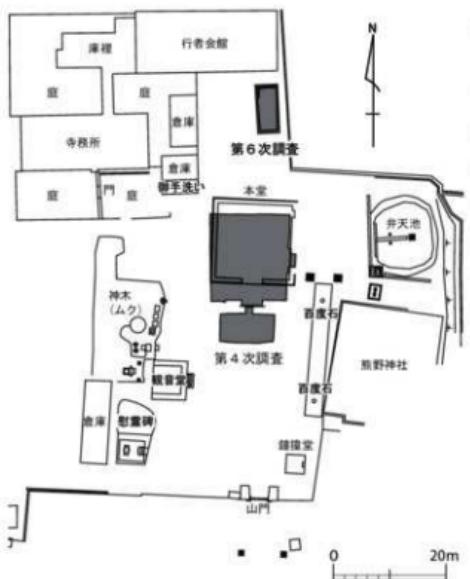


図3 吉祥草寺寺域 (S. = 1/1,000)

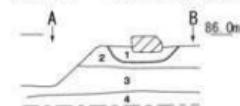


図4 第4次調査 紙石 9 断面図 (S. = 1/80)

楔痕跡が残り、礎石 20 には上面を平らに調整した痕跡が残っていた。このほか礎石 2・3・4 は径 28cm ほどの丸柱の痕跡が、礎石 19・21・23 には一辺 32cm 程の角柱の痕跡が残っていた。礎石の据付け状況は、図 4 に礎石 9 の断面図を示した。

基壇の東側辺には、本堂の東側に存在した祖師堂に至る渡り廊下があって、発掘調査ではその基壇を検出した。またここに瓦質の土管（図 6—19）6 個体以上が連結される配水管を検出した。建物の前面（南側）に溜まる雨水などを北側に流すための施設であろう。また、現在の渡り廊下の

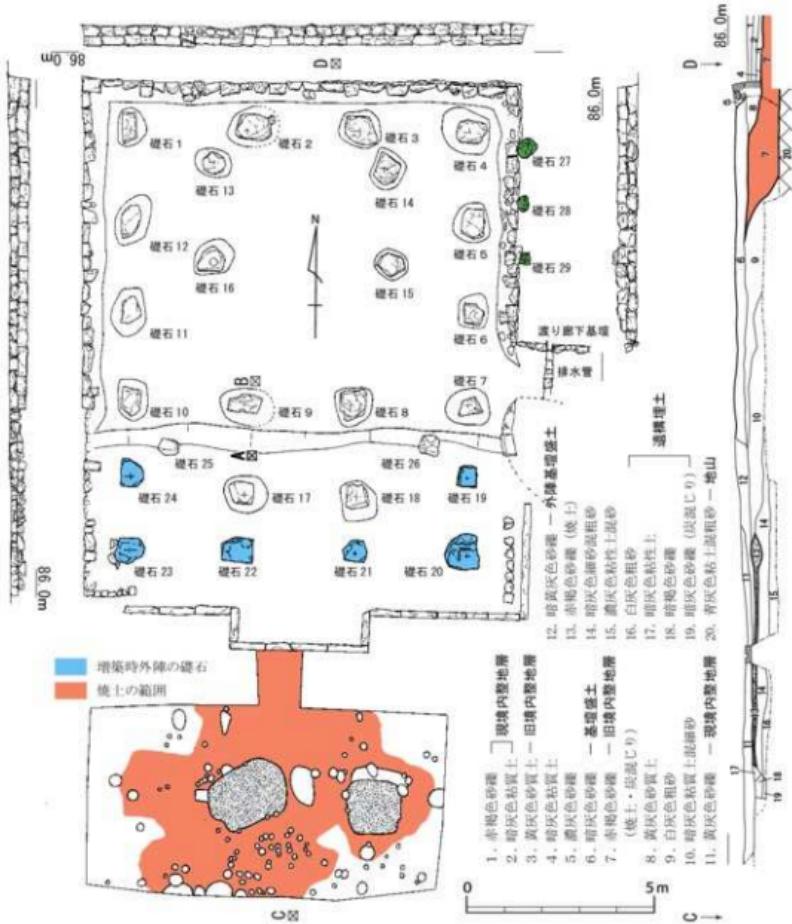


図 5 第4次調査 本堂平面・断面図 (S. = 1/150)

北側に礎石27～29とした3石の石材が確認できた。この石材の用途は不明であるが、あるいは元々の渡り廊下は現状よりも北側にあって、これに関わるものであった可能性などが考えられる。

本堂前面では、薄い焼土層の広がりや、調査区の中央付近に1辺が1.5～2m程の土坑が東西に2基存在することを確認した。今次調査では、該当部分は工事による掘削が行われないので、土坑埋土の除去は最小限に止めたが、そこには炭や焼土が混じり、その周囲には杭の痕跡も認められた。これらの土坑の形成時期は、現在のトンドが行われる場所より本堂に近い位置であることから、本堂に外陣が増築される以前のこと、つまり、17世紀の前半頃までであると考えられる。

③遺物（図6 図版2） 内陣再建時期に關わる遺物としては、旧境内整地層（図5～7層）出土のものと基壇盛土（同6層）出土のものがある。整地層からは土師器片がビニール袋（25×35cm、以下同）1袋分、瓦器片37点、須恵器片9点、黒色土器2点、鉄片1点が出土した。基壇盛土からは土師器片、瓦器片、陶器片、磁器（白磁）片、軒丸瓦の瓦当部がそれぞれ数点出土したほか、瓦片がビニール袋2袋分出土した。増築時の外陣基壇盛土（同12層）からは、土師器片がビニール袋2袋分、瓦器片18点、瓦質土器片20点、陶器片6点、磁器片6点、須恵器片2点、瓦片がコンテナ（40×60×15cm）約1.5箱分のほか、銭貨1枚、鉄片3点が出土した。また、渡り廊下基壇下で土管6個体以上が出土した。これらのうち、図化可能で年代等が一定程度判明するものを図6として掲げた。

旧境内整地層出土の遺物は1～16で、土師皿9点、瓦器椀7点を図示した。1は完形品であるが、その他はいずれも回転復原によって口径の数値を得た。

1～3は小形土師皿である。口縁部と底部との境に陵をなし、口縁部は外傾状に立ち上がって端部は丸い。それぞれの口径は、1は8.6cm、2は9.0cm、3は9.2cmである。

4・5は中形土師皿である。口縁部は外傾状に立ち上がっている。口縁部と底部の境界は、4は段をなし、5は稜になっている。4は口径11.3cm、5は口径11.6cmである。

6～9は大形土師皿である。口縁部はいずれも外傾状に立ち上がる。7・9は口縁部と底部の境は稜をなす。それぞれの口径は、6は13.6cm、7は13.8cm、8は15.0cm、9は16.0cmである。

10～15は瓦器椀である。口縁部の形状が判る14は丸く收めており、15はやや外反させ内面に沈線が施されている。口径は、14は9.4cm、15は13.6cmである。底部は、高台によって底部が中空仕上げになるもの（11・12）、底部が床面に接するもの（10・13・14）がある。高台の断面形は細長い逆三角形を呈するもの（10・11）と低い逆三角形を呈するもの（12～14）が認められる。内面の暗文は同心円、または渦巻き状に施されている。

16は湯呑形瓦器椀である。口径は7.6cmである。口縁端部が外反し内面に沈線が施されている。口縁部外面と、口縁部から体部にかけての内面は幅1mm以下のミガキがみられる。

基壇盛土（図7～6層）出土遺物のうち巴文軒丸瓦（17）を図示した。珠文の間隔が広く、珠文の外側に圓線は見られないが、巴文の尾は長く伸びている特徴が看取できる。瓦当の復原径は

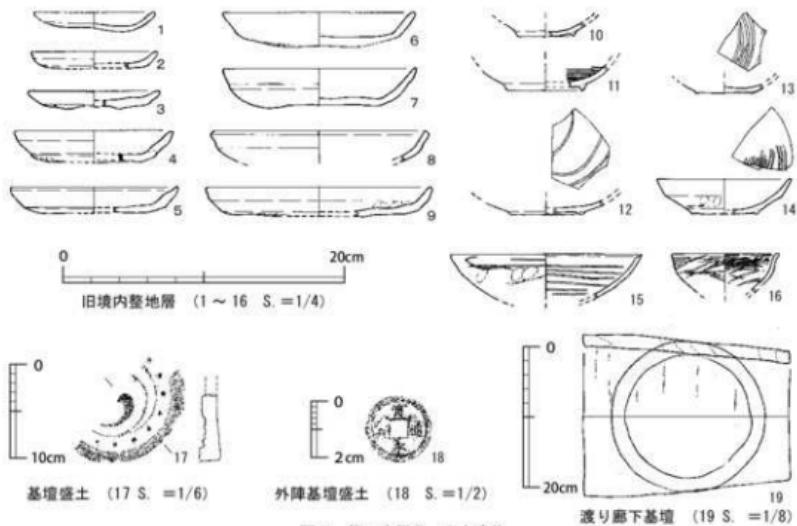


図6 第4次調査 出土遺物

15.3 cmである。

増築時の外陣基壇盛土（図7-12層）出土資料として寛永通宝（18）を掲げた。直径は2.4 cm、厚さは0.1 cm、重さは2.7 gである。

渡り廊下基壇で検出した土管は1点を図示した。瓦質の土管で、外面はナデ、内面はケズリで調整されている。部分的に布目痕がみられる。最大径は23.6 cmで、長さは29.4 cmである。

各出土遺物の年代を見ると、旧境内整地層出土のものは、小形土師器皿（1～3）および大形土師器皿（6～9）や瓦器椀（15）のようにやや古い要素をみせるものがある。しかし最も新しいものは、15以外の瓦器椀や中形土師器皿（4・5）で、14世紀前葉頃とみられる。基壇盛土出土の軒丸瓦も14世紀半ば前後のものとみられ、この時期に合致している。外陣増築

時の基壇盛土出土遺物は多くは図示できていないが、その下限は17世紀後半頃である。

(2) 第6次調査(図3・7・8 図版1-6・7)

①基本層序(図7 図版2-6・7) 長辺(南北)8.6 m、短辺(東西)3.9 mの調査区を設定し、



図7 第6次調査 調査区
平面・断面図 (S. = 1/150)

現地表面から最大深さ 1.2 mまでを掘削した。基本層序は地表面から順に、現境内整地層（1層・2層）、現代耕土（3層）、旧境内整地層（4層）が堆積し地山に至る。現境内整地層は、1層と2層に分かれるが、3層からも現代の遺物が出土するので、1層と2層の形成時期に差はないと考えられる。旧境内整地層である4層は、第4次調査で本堂基壇の北側で検出した旧境内整地層の上層（図5-3層）と同一層とみられる。なお、第6次調査では、図5-7層に対応する土層は認められなかった。

②遺構（図7 図版1-6） 4層上面において、埋桶を検出した。上部を失っているが、現代耕作に伴う肥溜め等の施設であると考えられる。桶は径約80cmで、深さは25cmが残存し、内部から巴文軒丸瓦、橘文軒平瓦、丸・平瓦片、陶磁器片が出土した。

③出土遺物（図8 図版2） 旧境内整地層（図7-4層）から土師器片約40点、瓦器片1点、瓦質擂鉢の底部片1点、布目痕のある瓦片1点、5層から土師器片3点、瓦器片2点が出土した。このうち完形に近い土師皿4点と瓦器皿1点を図示した。

1～4は小形土師皿である。いずれも口縁部が外傾状に立ち上がり、口縁部と底部との境はゆるやかに屈曲している。3・4は、底部が意識的に上げ底状に成形されたいわゆるヘソ皿である。それぞれの口径は、1は7.3cm、2は7.9cm、3は7.8cm、4は8.1cmである。14世紀中葉から15世紀初め頃のものと考えられる。

5は小形瓦器皿である。口径は8.6cm、器高は1.5cmである。底部内面には簡略化された平行線暗文が施されている。13世紀後葉頃のものと考えられる。

4.まとめ

第4次・第6次調査によって、吉祥草寺本堂の再建の時期を考古学的にも確認することができた。すなわち、第4次調査で認められた整地層は、焼土や炭などと共に14世紀前半頃までの遺物を含んでいた。また、第6次調査で検出したその上層の整地層は、14世紀中葉から15世紀初等頃の遺物を含んでいた。このことは、14世紀中頃に火災があってその後に本堂を再建したという寺伝と合致するものである。

本堂前面に関しては、下陣を増築した痕跡が基壇のあり方に現れていた。さらにその前には焼土層の広がりも検出できた。これらの成果は、現在奈良県無形民俗文化財に指定されている、「茅原のトンド」の初現を探る手かかりになるものと考えられる。

〈参考文献〉

木許守 2008 「茅原中ノ坊遺跡（第4次調査・吉祥草寺本堂）」『平成5～19年度 市内遺跡発掘調査』（『御所市文化財調査報告書』第34集）

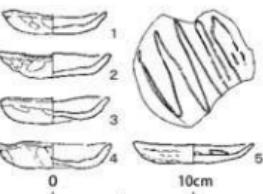


図8 第6次調査 旧境内整地層
出土遺物 (S. = 1/4)



1. 第4次調査 本堂基壇石積 西側辺（西から）



2. 第4次調査 本堂基壇石積 東側辺（北東から）



3. 第4次調査 内陣礎石据付け状況（東から）



4. 第4次調査 本堂北端 土層断面（南西から）



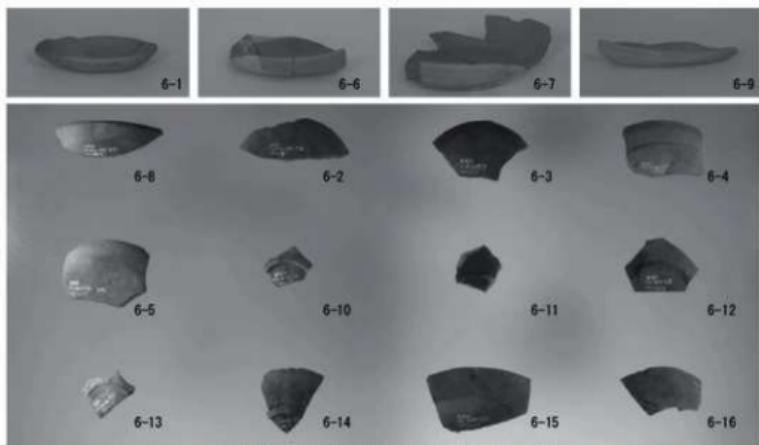
5. 第4次調査 渡り廊下基壇・排水管（北から）



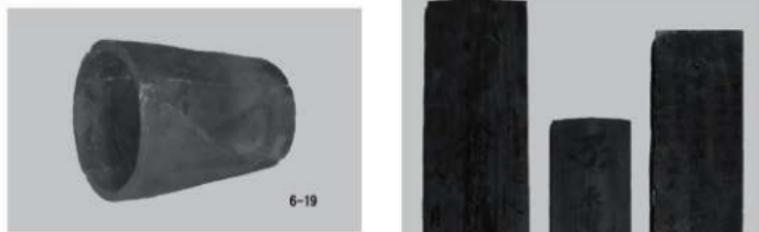
6. 第6次調査 調査区全景（南西から）



7. 第6次調査 北壁（南西から）



第4次調査 旧境内整地層 出土遺物 (S. ≈ 1/4)

第4次調査 基壇盛土
出土遺物 (S. ≈ 1/6)第4次調査 外陣基壇盛土
出土遺物 (S. ≈ 1/2)

第4次調査 渡り廊下基壇 出土遺物 (S. ≈ 1/8)

第6次調査
旧境内整地層
出土遺物 (S. ≈ 1/4)寛文五年 延宝四年 天和元年
護摩札 (S. ≈ 1/8)

報告書抄録

ふりがな	きっしょうそうじ							
書名	吉祥草寺							
副書名	茅原中ノ坊遺跡 第4次・第6次調査報告							
巻次								
シリーズ名	御所市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第38集							
編著者名	奥田智子・木許守							
編集機関	御所市教育委員会							
所在地	〒 639-2298 奈良県御所市 1-3 T E L 0745-62-3001							
発行年月日	西暦 2011年3月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (m)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
茅原中ノ坊 遺跡4次	同 茅原	29208		34° 27' 41"	135° 45' 56"	20050201 ～ 20050329	130	境内地本堂の 立て替え工事
茅原中ノ坊 遺跡6次	同 茅原	29208		34° 27' 41"	135° 45' 56"	20100419 ～ 20100421	33.54	トイレ新築工 事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
茅原中ノ坊 遺跡4次	本堂跡	室町・近 世	本堂基壇・礎石・トン ド（左義長）跡らしき 土坑	瓦器・土師器・瓦片・ 陶磁器・錢貨・土管				
茅原中ノ坊 遺跡6次	寺域内	室町		瓦器・土師器・瓦片・ 陶磁器				

吉祥草寺

-茅原中ノ坊遺跡 第4次・第6次発掘調査報告-

御所市文化財調査報告書 第38集

平成23年(2011年)3月10日

編集・発行 御所市教育委員会

御所市1-3

印 刷 株式会社 笹田印刷所

奈良県御所市今住16-3